

東 雲

第六号

9 年 (1997) 9 月



南部広域行政組合
島尻教育研究所

目 次

- 随 想 夕 映 え の 空 所長 宮 城 恒 彦…………… 1
- 修了者及び後期入所予定者、指導講師一覧…………… 3
- 感性を育てよう 島尻地区校長会会長
津嘉山小学校長 知 念 清 雄…………… 4
- 研修を終えて 島尻教育研究所 教育研究員…………… 6
- 島尻教育研究所図書室の紹介……………13



随想　夕映えの空

所長　宮　城　恒　彦

ウォークマンを両方の耳に当てながら道を歩いている若者が目につく。肩幅の半分ぐらいの小さなリュックを背負って、耳に流れている曲に夢中の様子である。視点の定まらない眼をして歩いている。中にはリズムに合わせるように指先を動かしている者もある。辺りには「我関せず」と、全く自分独りの音の世界に浸り、周りの景色や物音を遮断している。両方の耳をふさいでいる形になっているので、辺りの物音がよく聞こえないであろう。風景は見ていても観えてはいないだろう。

最近の子供たちは「自然」との触れ合いから遠のいてきている感を強くする。自然を友として遊ぶ中から学ぶもの、吸収するものが多いのに、目を向けようとしない。明るい電灯のお陰で月夜の感動もなく、闇夜の怖さも知らない。建物もしっかりしているので、台風の恐ろしさもあまり感じなくなった。クーラーの冷たさは分かるが、そよ吹く風の心地良さをどのくらい感じ取っている子がいるだろうか。自然の音に耳を傾ける機会がどのくらいあるだろうか。長い時間、テレビ、ラジカセなどの音響の中で過ごしている子供たちは、自然への五官のアンテナの反応が鈍くなりつつある。便利になった社会や生活がそうさせているのではないか。

日常生活で「好ましいと感じる音は」のアンケート調査（環境庁）の結果は「小鳥の声」が一位で87%、後は「虫の声」（63%）、「川のせせらぎ」（55%）、「木の葉がそよぐ音」（49%）と続く。それらは私たちの耳から遠のいていきつつある懐かしい音である。五位にくるのが「風鈴の音」だが、クーラーの効いた部屋には飾り物にもならないのではないか。回答の11項目の中で「祭りの音」「音楽・歌声」が最下位になっているのには考えさせられる。上位四つの音は環境破壊のために、または、自然との交流断絶を余儀なくさせられている生活様式のために私たちの周りから消えつつある。

心豊かに生きていくには感性を磨く必要がある。「感性とは、外界の刺激に応じて何らかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働き」であるという。生まれつき備わっている生理的感情を基礎にして、発達過程における大人との関わりの中で感性は育まれていくのである。例えば、身近の大人が草花を見て、その美しさや神秘さに感嘆、感動の声を発すれば、子供も同じ感情表現をまねて自分の感情を形づくり、そして、豊かな感性が培われていく。

ある夏の朝早く、庭木の幹にセミの抜け殻を発見した。それに寄り添うように生まれ

たばかりのセミが透明な水色の羽を乾かすように側にじっとしている。その殻を見た五歳の孫が「これは何？」とすかさず私に尋ねた。その答えの言葉を探そうと懸命になっていた時、間髪をいれずに、「お母さんだ！」の答えが返ってきたのには、参ってしまった。幼児の感覚の鋭さと瑞々しさには脱帽した。

ある学級での話。二学期の始業の初めに、夏休みに遊びにいった所を子供たちに発表させた。ディズニーランド、魚釣り、キャンプ、旅行等、家族そろって出かけた所の感想を楽しそうに話している子供たちの中に、それらの話を羨ましそうに聴いていた母子家庭の子がいた。担任はその子に指名した。「お母さんが忙がしいので、どこにも行きませんでした。ある日の夕方、お母さんと二人で窓から海の向こうに沈んでいく赤い夕日を長い間、眺めていました。その後、お母さんが一言『ごめんね』と言いました」。感動した担任の目は潤んだ。刻々と色合いを変える夕映えの空をこの親子はどんな思いで見つめていたのであろう。今までの友達の話しに浮かれていた学級の皆が静かになったという。それこそ親からの夏休みの最高のプレゼントではないか。

子供は大人をまねるものである。親や保護者が自然界の美的変化に対して美を感じ、また、社会の出来事、人間の行動や態度の善悪に対して正しい表現のできるモデルであって欲しいものである。

平成9年9月 吉日



平成9年度 前期 教育研究修了者及びテーマ一覧

期数	氏名	勤務校	教科・領域	研究テーマ
前期	1 糸数 佐百合	知念村立 知念小学校	国語	主体的な表現意欲を育てる授業の工夫 － 2年教材「スイミー」の学習指導を通して －
	2 宮城 利恵子	与那原町立 与那原東小学校	生活科	豊かな体験を通して生き生きと活動する児童の育成 － 一人一人の思いや願いを生かした生活科授業の創造 －
	3 具志 幸恵	糸満市立 糸満小学校	特別活動	主体的に活動する意欲を育てる学級活動 － 話し合い活動の支援の工夫 －
	4 富永 真智子	糸満市立 糸満南小学校	学級経営	一人一人が楽しく充実した生活のできる学級経営をめざして － 個を生かす学級経営の改善・工夫を通して －
	5 照屋 静江	糸満市立 兼城小学校	学校経営	校内研究を活性化させる学校経営 － 組織・運営の工夫を通して －
	6 下地 米子	豊見城村立 豊見城小学校	教育相談	望ましい人間関係を育てるための教育相談 － いじめ問題とその対策を通して －
	7 伊井 秀治	与那原町立 与那原中学校	教育相談	生徒の自己教育力を高める教育相談 － 不登校生徒の理解と援助の在り方を通して －

平成9年度 指導講師及び担当教科

講師氏名	教科・領域	所属等	講師氏名	教科・領域	所属等
竹本 祐子	国語	豊見城村教育委員会	名嘉元 美佐子	幼稚園教育	豊見城幼稚園教頭
上原 弘子	生活科	翔南小学校教頭	上原 須美子	幼稚園教育	潮平幼稚園教頭
高良 清吉	特別活動	とよみ小学校校長	大城 早智子	国語	喜屋武小学校教頭
荷川取 幸代	学級経営	伊良波小学校教諭	仲里 好子	道徳	光洋小学校校長
知念 清雄	学校経営	津嘉山小学校校長	松吉 洋子	数学	島尻教育事務所指導主事
安次嶺 敏雄	教育相談	潮平小学校教頭	與座 忠志	特殊教育	南星中学校校長

平成9年度 後期 入所予定者及びテーマ一覧

期数	氏名	勤務校	教科・領域	研究テーマ
後期	1 上原 順子	糸満市立 潮平幼稚園	幼稚園教育	幼児一人一人が友達との関わりの中で育ち合う援助について
	2 仲里 竹子	南風原町立 北丘幼稚園	幼稚園教育	思いやりのある幼児を育てるための援助の工夫
	3 上原 千秋	糸満市立 喜屋武小学校	国語	主体的に学ぶ育てる学習指導のあり方 － 物語文の指導を通して －
	4 石川 なおみ	糸満市立 潮平小学校	国語	自ら見つける読書の楽しさ － 楽しく読解力をつけるための手だて －
	5 平田 勝典	糸満市立 光洋小学校	国語	「交信する子ども」を育む国語科教育 － 文学教材の学習を中心に －
	6 玉那覇 明美	佐敷町立 佐敷小学校	国語	読む楽しさを見つける読書指導のあり方
	7 銘 莉 繁雄	糸満市立 糸満小学校	特殊教育	知的障害児における生活科（理科）指導の工夫 － 年間指導計画の作成を通して －
	8 前里 朱美	東風平町立 白川小学校	道徳	道徳の授業展開の工夫 － 思いやりの心を育てるために －
	9 比嘉 智也	東風平町立 東風平中学校	数学	数学的な見方・考え方を生かす指導の工夫



感性を育てよう

島尻地区校長会会長

津嘉山小校長 知 念 清 雄

テレビを見ていたら、某高校の家庭科の保育の時間に「赤ちゃん体験」ということで、某産婦人科の「新生児室」で、赤ちゃんを抱っこしている姿に興味深く見た。おぼつかない手つきで、腫物に触るようにおそるおそる抱き上げている。先生に促されて茶髪の女生徒は、頬に触れて見たり、匂いを嗅いだり、見つめ合ったりしている。硬張った最初の頃の顔が次第に柔和な、人間として大切なものに触れたような至福の顔になっていくのは不思議である。おそらく彼女は、柔らかい赤ちゃんの肌、甘ずっぱい匂い、くりくりした澄んだ瞳、抱いていて胸に伝わる心臓の鼓動を感じとったに相違ない。人間としてその生命^{いのち}を体ごと感知した幸福感で、胸の高鳴りを押えることが出来なかったと思う。

少子化が進み、自分の弟や妹を抱っこしたり、負ったりして世話をする子が少なくなり赤ちゃんを通して感動体験が少なくなっているのではないか。感動性の深いものは子どもの心をゆすぶって、感受能力を開発するばかりでなく、感受性を豊かに育てられた子どもは、物事の判断においても、行動に際しても正しく適応していくものと思われる。

本校の校内の「いこいのにわ」に池がありグッピーやメダカ、ヤゴなどの水生生物が数多く住んでいる。子どもたちは、休み時間ともなると我先にと池のまわりに集まってくる。観察したり、手をさしのべたり、友だちと語り合ったり、実に楽しそうに遊んでいる。子どもたちの様子を見ていたA先生も中に入り「色のついたのもいるね。この小さいのかわいいよ。ほら、向うに大きいのと小さいのが並んで泳いでいるでしょう。親子みたいだね」と言って語り合っている。さすがA先生だ！「池は危険だから運動場へ行って遊びなさい」とか、「またグッピーをつかまえているのか」とは言わなかった。私は、子どもと共にその美しさに感動し合う気持ちや共に行動するA先生の姿勢に改めて敬服した。思うに、感動を体験できる環境をつくることも大事だが、教師自身が自ら感ずる心、感動する心、感性豊かな人間性でありたいものだ。自分自身を取り巻く、すべての環境事象に対して意欲的にかかわり、それらに対する感受性を豊かにすることは、子どもの教育にとって最も重要なことである。自然のすばらしさを感じ取る資質や能力を体験を通して数多く持つことを教育の場に取り入れたいものである。

我々が環境教育を重要視するのは、環境に対する豊かな感受性と環境について自ら課題を見つけ、考え、主体的に判断し、課題を解決する能力を培うとともに、人間と自然との共存の中で、思いやる心や感動する心を有する人間の育成にある。そのためには、人間の諸活動の出発点であり、行為や行動の根源となる感性を豊かに培う必要があろう。感性とは、価値あるものに気付く感覚や感情だと受け止めれば、美術や音楽や文学の領域だけではなく、いろんな分野に存在する。

前述の「いこいのにわ」での遊びから、子どもは次のような詩を書いている。

グッピーの赤ちゃん

(津嘉山小3年)

金城吉野

グッピーの赤ちゃんは
とても小さい
つかまえようとすると
すばやくにげる

えさがおちてきたとき
たべたいけど食べられない
こまかくしてあげた
小さな口でおいしそうに
食べている
グッピーてかわいいなあ

我々は、学校や地域によりよい環境を作ることによって、子どものみずみずしい感受性を刺激し、さまざまな発見の中から好奇心を育て、創造力育成の基礎をつくる必要があるであろう。

年々、自然の喪失、家庭や地域の崩壊等にもない、感性や情操を失ないつつある人間が多くなった現在、故郷は家庭であり、風景は家庭であるという心象風景を作り出すことも必要であろう。感性を豊かに育くむことによって非行問題の解消や豊かな人間関係の樹立、生きることのすばらしさが培われていくと考えるのは言い過ぎでしょうか。





素晴らしい先生方との出会い

— 所内研修について —

知念村立知念小学校教諭 糸 数 佐百合

島尻教育研究所での研修を終えるにあたりあらためて振り返ってみますと、私にとっては初めてテーマ研究に取り組んだ6ヶ月間で、自分の力量を思い知り、手探りの中、何とかこれからの課題を見つけることができた日々でした。研究は苦しいものでしたが、それでも「研究所に来てよかった。」と思うことが何度もありました。特に所内研修として行われた数々の講話の後には、自分たちほど恵まれた教師はいないだろうと、研究員どうして話したものです。

所長とお二人の主事の講話が毎月一回ずつ組まれており、宮城所長からは社会の変化と教育の流れについて、文章の読み方、書き方、そして児童生徒への接し方から子育て、家族のありかたなど、教師としてだけでなく、これから生きていくうえでも参考となる貴重なお話を数多く聞かせていただきました。また、糸満主事からは教育法規や教師として身につけておきたい素養、一般社会と教師の考え方の違いについてなどを、賀数主事からはパソコンの基礎的知識と基本操作を教えてくださいました。さらに、六名の指導講師による講話では、それぞれの教科領域に関する専門性の高いお話や、豊富な経験に基づいた興味深いお話などを聞かせていただき、貴重な資料や作品なども見せていただきました。管内の校長講話として、兼城小学校の酒屋祐定先生、豊見城小学校の與儀芳彦先生、南風原中学校の照屋善三先生のお話を聞くこともできました。どなたのお話からも子供達に対する愛情の深さや職員への思いやりなどが伝わり、感激するとともに教育者として、また人生の大先輩として尊敬できる方々のお話をしっかり胸に刻みたいと思いました。応用教育研究所研修主事でいらっしゃる宮良用倫先生の、長い経験に裏付けされた教育心理検査に関するお話や「清ら言葉、島言葉」の演題でお話くださった方言キャスターの伊狩典子先生の講演も現場ではなかなか機会を得ない貴重で有意義な研修でありました。

所内講話をしてくださった14名の先生方は、教育、あるいは専門としている分野において深い知識と優れた技術を備えているだけでなく、人を引きつける魅力と、温かみがどなたにも共通して感じられました。教師にとって、自分自身の人間性を高めることがどれだけ大切であるかを言葉だけでなく身をもって教えてくださったように思いました。私は講話の度に、これまでの自分を深く反省し、次の実践に向けて密かな決意を抱きました。現場に戻ってまた忙しくなってもきっと以前の自分よりは少し成長しているのではないかと考えています。短期間でこれ程充実した研修を経験できたことは教師として本当に幸せなことであり、関係各位の方々に心より感謝申し上げるとともに今後は少しでも多く子供たちに還元できるよう努力していくつもりです。

研究所での素晴らしい出会いを忘れずに……。



自然と共に生きる人々 ～ 飛騨高山・黒部アルペンルート、県外研修旅行 ～

与那原町立与那原東小学校教諭 宮 城 利恵子

“さわやかな春色を楽しむ旅”へ出発したのは4月22日。その日訪れた高山はまだ肌寒く、風に揺れる染井吉野がひらひらと花びらを散らせながら私たちを迎えてくれた。入所してまだ日の浅い私たちメンバーはこの時期この地にいられることの幸せをかみしめながら新緑の春を満喫しようと遅くまで高山散策を楽しんだ。頬をなでる冷たい風に沖縄から遠く離れた距離感を感じながらも道ばたのつくしや橋の袂の枝垂れ桜に沖縄では味わえない“春”を十分堪能できた。その晩は山菜や飛騨牛の豪華な夕食を前にしながら山深い自然の美しさとそれをうまく生かしながら風情豊かにたたずむ城下町高山の話題に一同花を咲かせる。

そして2日目、高山から白川郷へは快適なジャンボタクシーでの移動。車窓から見渡す山肌の木々は所どころに白い雪を残しながらも寒さをものとしめない凜とした表情でどこまでも続く。そんないくつもの山々を越え、いよいよ眼前に合掌造りの家々が広がった瞬間、思わず手をたたきながら全員一斉に歓声を上げる。豪雪地帯という厳しい条件から生み出された建物は独特の趣があり、また、あまりにも見事で、まるで絵巻物の世界にいるような錯覚さえ覚えた。それを生み出した人々の知恵と自然の厳しさに耐えながらも逆らわずに共に生きていこうとする姿に深く心を打たれる。

3日目、いよいよ旅のクライマックス立山黒部アルペンルートへ。1年にこの数日間のみの開通という雪の大谷へ降り立つことができた私たちは、今更ながらこの旅の幸運をかみしめる。青空と白銀の峰々の織り成すコントラストの見事さに息をのみながら自然の作り出した異次元の世界にただ驚きと感動の連続。粉雪の結晶をじっくり観察しながら雪道を歩いたあの感激は生涯忘れないだろう。

そして黒部ダム。峡谷、密林、半年以上は雪の中、そんな人を寄せつけない厳しい自然条件の中で挑んだダム建設。「何と……………」目の前のダムのスケールの大きさに圧倒されながら人間の技の偉大さをかみしめる。黒部ダムは、自然との共生に向けた新しい人間の営みとしても評価が高いという。ここでもまた、自然に逆らわず自然をうまく生かしながら生きていくことの大切さを強く感じさせられた。人間のもつ計り知れない可能性に感動しながらも自然に生かされている自分たちを忘れてはいけぬ。そう実感した。

「自然との共生」その事の大切さを学ぶことのできた三泊四日の有意義な県外研修だった。

最後にこの半年間の研修の機会を与え支えて下さった全ての皆様に心から感謝申し上げ、この研究所で学んだことを糧に、今後も努力を忘れずに学び続けていきたいと思う。



自分を見つめ直す — 検証授業を通して —

糸満市立糸満小学校教諭 具 志 幸 恵

6 カ月という研修期間は、いろいろなことを学び、経験できた貴重な時間でした。特に、各自の研究については、それぞれテーマをもって取り組み、その中で四名の研究員が、研究の仮説を検証するために授業を行いました。検証授業を通して、今までの自分を見つめ直し、自分なりの授業の在り方や指導の方法を見つけることができたような気がします。所長の「成果を気にせずに、自分の納得いく授業をやって下さい」ということは、大変大きな励みになりました。

授業を行うに当たって、私たちにはハンディがありました。それは、学級の子どもたちの実態を知らないということでした。だから、まず担任の先生と連携をとり、子どもたちを把握するためにコミュニケーションを図ることから始めました。そして、授業計画に合わせて、学校に通い、検証授業の日まで試行錯誤しながら進めていったのです。

私たちの不安をよそに、検証授業では子どもたちは生き生きと授業に参加してくれました。子どもたちの思いを知り、彼らに活動の場を与え、自分たちの手でやり遂げたという成就感を持たせるための支援がいかに大切であるかがわかりました。しかし、その一方で、時間配分や助言のタイミングの悪さなど事前の準備、研究不足など、多くの課題を残しました。

また、研究員の仲間の授業を参観することは、今後の授業の参考となると共に、自分の授業を見つめ直すよい機会となりました。授業は仮説を検証するものになっているかを客観的に評価するために、「抽出児童の行動・発言」「教師の行動・発言」「観察集団の傾向」という視点にそって役割分担し観察を行いました。私の役割であった抽出児童の観察は、時間を追って児童の反応を見るもので、その子のつぶやきや表情まで細かく観察し記録することができました。児童が教師の発問に対して様々な反応をしていることを目の当たりにし、改めて教師の発問の大切さ、児童一人一人を見つめようとする教師の姿勢とそのための授業の工夫が必要であるということがわかりました。

授業後は反省会をもち、データを基にそれぞれの視点からの感想や意見を述べ合いました。その中で、自分では見つけることのできなかった問題点に気づき、改善すべき点が明確になりました。両指導主事や指導講師の先生、所長の厳しく、そして温かな指導や助言を受け、これからの自分の進むべき研究の方向が見えてきたような気がしました。

研究所での研修は、これまでの教師としての自分を振り返らせ、そしてこれからの自分にたくさんの示唆を与えてくれました。これで研究が終わったのではなく、むしろ、入り口を見つけて今から始まるのだという気持ちで現場に戻っても日々努力していきたいと思います。

私たちに本当に多くのものを残して下さった宮城所長、糸満主任指導主事、賀数指導主事、指導講師の先生方、そして研究所へ快く送り出して下さった校長先生、お世話になった方々へ心より感謝申し上げます。



「三分間スピーチ」「大切な話」を通して

糸満市立糸満南小学校教諭 富 永 真智子

「どうしよう…」これは「三分間スピーチ」「大切な話」の時間があると聞いた時の私の最初の気持ちです。改まった席や人前で話すことの苦手な私にとって、一番心配な時間でした。でも、「自分は今勉強しにきているんだ。すべてが私のためなんだ。ちょうどよかった。スピーチの仕方を教えてもらえる。」という気持ちでいこうと、ドキドキしながらその時間をむかえていました。あれから5か月が過ぎ、まだ話すことはへたですが、その時間がとても楽しみになってきています。それは、所長やお二人の主事、そして研究員みんなの率直な考えを聞くことのできる貴重な時間だからです。何がテーマなのか全くわからずに入る時間ですが、全員が必ず感想や考えを言うので、いろいろなことが勉強になる時間でした。生き方、夫婦の在り方、親としての在り方、そして教師としての心構えなど得ることばかりでした。最初は緊張して「大変だ、大変だ。」と思っていたことも、糸満主事、賀数主事、そして宮城所長のかざりのない、ユーモアを交えた体験談を聞くことにより、私たち研究員は心を開いて何でも言えるようになってきました。何だか不思議な気もしますが、この時間のおかげで、お互いの距離がぐっと縮まったような気がします。最後には、所長のまとめのお話がありましたが、どの考えをも受け入れて、そして人生の指針を示して下さるので、感激し、楽しく充実して過ごすことができました。

スピーチの時間で特に印象に残っているのは、5月の「母の日に寄せて」というテーマの時のことです。最初から涙ぐんでの話で始まり、みんなのお母さんへの思いが語られましたが、所長からも、お母さんに対するお話の書かれた資料や詩も配られ、スピーチの時間が過ぎても、研究室の中では、午前中ずっと、泣きながら母への感謝・思いを語る時間となっていました。みんなのお母さんを思うやさしい気持ちがあふれている時間になっていました。

その他、「形の美しさ」という話の後には、みんな字をていねいに書く事を意識するようになりました。「言い伝え」の時は、いろいろな言い伝えを知ることができましたが、後では幽霊話のようになって楽しかったです。「香港返還」や「護佐丸と阿麻和利」の話は歴史の勉強になり、「日常の作法」「子育て奮闘記」「感謝」「誇りに思うこと」「朝飯前」「ブタも木に登る」「ゆっくり急ぐ教育」なども印象に残っています。

「三分間スピーチ」「大切な話」は、現場では絶対に体験することのできない素晴らしい時間でした。自分の考え行動を反省し、変えたきっかけにもなり、ありがたい時間でした。

その他、すべての研修において「有り難いなあ。」と思うことばかりの素晴らしい期間でしたが、この半年間の研修の機会を与えて下さった校長先生、教頭先生はじめ、各関係者の皆様に厚くお礼を申し上げたいと思います。

そして、宮城所長、糸満主任主事、賀数主事、指導講師の荷川取先生には、いつでも親切に丁寧に、細かくご指導いただきました。心から深く感謝しています。本当にありがとうございました。



わかば 香る 季節 に

—入所にあたって—

糸満市立兼城小学校教諭 照屋 静江

ぴしっとしたスーツに身を包み、緊張の面持ちで研究員としての第一歩を踏み出した4月2日。あれから、やがて6カ月が過ぎようとしています。研究室に入った瞬間のあの感激、宮城所長のお話、そしてひきしまった入所式、いずれも感慨深いものであったことを思い出します。

研究室は、第5期生の温かい心配りで溢れ、私たち7名を迎えてくれました。「入所おめでとう」と書かれた桜の花びら、黄色いたんぽぽや蝶の舞う野原の壁絵、テーブルの青々としたポトスなど、わかばの季節にぴったりの研究室に唯々感激するばかりでした。そして、一人一人に送られた激励のメッセージを読んでいるうちに肩の力が少しずつほぐれていくのを感じつつ、感謝の気持ちで一杯になりました。

宮城所長には「三人行なえば必ず我が師あり」と流麗達筆に書かれた色紙をいただきました。そして、研究の指針となるお言葉を、身の引き締まる思いで聞かせていただきました。出会いの大切さ、学ぶ対象がたくさんあること、学ぶ立場に立って謙虚に学ぶこと、幅広い見識と弾力性のある考え方をもって研究をすすめることなど訓話なさいました。厳しさ以上の温かさに大きな不安から「よし、こびりついた錆を落としながら頑張るぞ!」という決意に変わったのを覚えています。

定刻どおり始まった入所式は島袋教育長をはじめ多くの関係各位に見守られ厳粛な中で取り行われました。お偉い方々に囲まれての入所式とあって、研究員7名の緊張度はピークに達しました。「学校を外から見てみたい。」「心の充電がしたい。」などの入所の動機は甘かったのでは……自分の来る所ではなかったのでは……と自問自答したものです。ところが今では、宮城所長、糸満主任指導主事、賀数指導主事はじめ指導講師の先生方の細部に及ぶご指導と包み込むような温かさに支えられ、入所式のあの不安な気持ちから「これだけはわかるようになった。」という自信に変わってきたことを実感しています。

入所以来、数多くの人や出来事との出会いがありました。所長が話されたように、すべての出会いが、これまでの自分を見直すよい機会となり有り難く思っています。5月に大里村立大里中学校の教頭として昇進された上原幸得指導主事には、4月22日からの県外研修でもゆったりした雰囲気研修させていただき、一言では言い尽せぬ感謝の気持ちを抱いています。また楽しいことも苦しいことも共有し合い、励まし合い、高め合った仲間との出会いは、かけがえのないものとなっています。

わかばの会は、木々の若葉が燦々と降り注ぐ太陽の恵みを受け色濃くなるにつれ、お互いの研究も親交も深まってきました。これらの出会いも研究の成果の一つにして、今後の実践活動に生かしていきたいと思います。最後に、6カ月間の研修の機会をくださった関係各位に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



研修を振り返って

豊見城村立豊見城小学校教諭 下地 米子

入所式から早6カ月、当時の事が最近のここのように鮮明に思い出されます。所長をはじめ研究所の関係機関の各位に歓迎され、重々しい雰囲気の中で期待よりも先に、わたくしのような者が……と不安と緊張で複雑な思いでいました。しかし、所長のあいさつのなかで、逃げ腰になっているわたくしを奮起させる言葉がありました。それは「日頃の教育現場では、自己を見つめ直す機会が少なく、目の前の子どもの指導に忙殺されている。研究所は、客観的に自分の姿をとらえる場所と時間を与えてくれる。『流行』の世の中であって、何が教育の『不易』なのかを探る機会である。」です。これは、仕事に流され、教師としての新鮮さも薄れ、思い悩んでいた私に、共感的な言葉として心に響き研鑽への意欲へと気を取り直させてくれました。

研究所での研修は新鮮さと感動そのものでした。教職員以外の南部振興会の方々と出会えたことは勿論、学校現場において到底経験できない研修内容ばかりで、充実感と満足感がありました。反面、視野の狭さ、話す、書くことのつらさ、パソコン等への抵抗などで自己嫌悪に陥ることも度々ありました。でも、所長や主事のさりげない励ましと温かさ、仲間の思いやりに支えられて大過なく過ごすことができました。そして、不得意とする諸々に挑戦し、自己を開発するために努力している新しい自分を発見しました。

今思えば、研究所における全ての体験が、わたくしの研究テーマの人間関係づくりの素地として、無言のなかに実践されていたのです。落ちこぼれかけたわたくしは、周りの方々の支援と援助により心地よい居場所として研究に取り組むことができました。「三分間スピーチ」や「大切な話」などは、相手の考え方や立場、能力を認め、相互理解、コミュニケーションを図る手立てとして学級づくりにも十分活かせるのです。

また、図書室の多くの文献に初めて出会ったとき、手当たり次第にめくっていた自分を思い出します。これまでゆとりがなかったことへの反動としてとらえると、心と時間のゆとりが気持ちを高揚させることを知りました。これは現場での学習の場づくりに活かされ、個に応じた学習指導に応用できると実感しました。それに、いつでも側において活用するようになった辞典。子ども達にも習慣化するまで進めたいと思います。

「岸にたって教育を眺めてみるのもよし」と、4月の頃言われた時、自分のことも周りも見えなくなっていたもう一人の自分がいました。でも今、沸き立つものを感じます。深夜遅くまであてもないこうでもない悩み苦しんで仕上げたレポート……。このことが、こびりついた錆が少し欠け落ちたということでしょう。この六カ月間で、書き尽くせないほどの収穫がありました。学校現場ではそれを少しずつ取り出しながら、実践に役立てていきたいと思います。

最後に、研究の機会を与えてくださった関係機関の皆様、所長、主事、担当の安次嶺先生、それに快く研究に送りだしてくださった校長、教頭、諸先生方に心より感謝申し上げます。



島尻教育研究所の一日

与那原町立与那原中学校教諭 伊井 秀 治

遥かに八重瀬岳を望み、木々の緑に囲まれた島尻教育研究所の一日は、朝の清掃から始まります。右手にほうき、左手にちりとり、そして笑顔とにじむ汗。指導主事や南部振興会の方々と、共に汗を流し、談笑しながらの十数分間は、お互いの気持ちをなごませ、その一日の研修が実りあるものになることを予感させてくれます。

研究所の大まかなスケジュールは次のようになります。

まず、月・水・金曜日は朝のミーティングと、それに引き続いて所内研修があります。ミーティングでは、日程の確認や諸連絡の外に、時事問題、教育問題、年中行事や季節の話題など、学校ではあまり話題にならない「ちょっといい話」をたくさん聞くことができました。ミーティングに引き続き、月曜日は宮城所長、糸満・賀数両指導主事による定例講話があります。教育の今日的課題、様々な文章の読み方や書き方、教師に求められる資質、コンピュータ研修など、それぞれの先生の得意分野を生かした特色ある講話で、教師としての見識や考え方を深めることができました。水曜日は、外山滋比古氏の著書『学校で出来ること出来ないこと』の中から、研究員が一つの話題を選定し、それをもとに、学校・家庭をめぐる問題や子どものしつけなどについて話し合いました（大切な話）。金曜日は、それぞれの研究員による3分間スピーチで、様々な体験に基づく、個性あふれる話を聞くことが出来ました。月曜日の講話は言うまでもなく、水・金曜日の「大切な話」、「3分間スピーチ」も、年齢、性別、育った環境、教職経験などが違う、研究員一人一人の貴重な体験や考えを聞くことができ、人間として大きく成長させられたような気がします。

月・水・金曜日の午後と、火・木曜日は原則として自主研究の時間です。各々の研究テーマに沿って理論研究を深めたり、学校に出向いて検証授業の準備をしたり、研究内容をまとめたりしました。四月当初は、研究の方向も定まらず、ただ何となく時間を費やしていた感がありましたが、本格的に研究に取り組む段になると、いくら時間があっても足りませんでした。結局、検討会が迫ると夜遅く、或いは、夕やみ迫るころまで居残ってレポートを仕上げるというありさまでした。家路を急ぐころには、駐車場のベンジャミンの梢では、雀がせわしく寝床をこしらえ、西の空には宵の明星がひととき大きく輝いていました。おかげで、「ねぐらへ急ぐ群れ鳥に 光りほのかな宵の星」という島尻教育研究所逍遙歌のひとこまを実感することができました。

また、研修の合間の休憩時間や昼食時間も有意義な時間でした。日頃の研究や教師という立場を離れて、家族のこと、育児のこと、昔の思い出話など、いろいろな話に花が咲きました。冗談を言って笑ったり、愚痴をこぼしたり、悩みを打ち明けたり……。そのような中で、研究以上に大切な、人と人との心の結びつきが生まれたように思います。そして、研究所の基本方針である「三人行えば必ずわが師有り」の言葉通り、お互いの良い点は学びあい、足りない点は補いあい、共に成長することができたと思います。

その他、指導講師の先生方や島尻管内の校長先生方による講話、所外研修での様々な施設の訪問、三味線や琉球舞踊の練習など、教師としての資質を向上させる研修が盛りだくさんで、本当に充実した6か月間でした。最後になりましたが、このような充実した研修の機会を与えて下さった関係各位の皆様に、心より感謝申し上げ、結びにかえたいと思います。ありがとうございました。

島尻教育研究所図書室の紹介

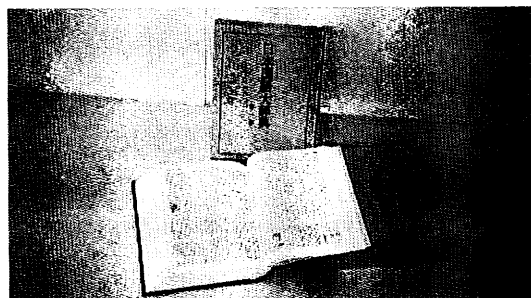
島尻教育研究所には全国各研究所の研究紀要、教育関係図書、雑誌類が保管されています。また、辞書類には、特に力を入れ収集していますので、必要な場合は、当研究所の図書室をご利用下さい。今回は第一回目であり、特徴としている辞書類を中心に蔵書の紹介をします。

日本国語大事典（縮刷版）

発行所 小学館

第1巻の刊行以来7年の歳月をかけて、全20巻の本格的な国語辞典を完結させています。

当研究所にはその縮刷版（10巻）をおいてあります。豊富な引用例・語彙・方言、俗語なども収められており、国語の範囲を超え、他の分野における活用も可能です。

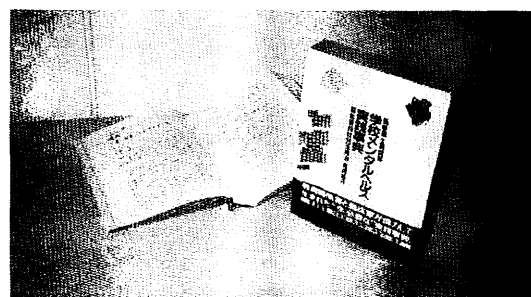


学校メンタルヘルス実践辞典

発行所 日本図書センター

監修 土居健郎

最近の調査結果によると不登校児童・生徒の数が増えていると報告されています。土居氏も「青少年の心が蝕まれているための問題があまりにも多く発生しているからである。」と述べており、これからは、“精神保健”の分野においても教育者とその専門の方々との連携の必要性を指摘しています。本書は精神衛生の専門家が実践的な事例（学校教育）を中心に分かりやすく解説をしており、教育関係者にも読んでもらいたい一冊です。



昭和文学全集

発行所 小学館

編集委員 井上靖、大岡信 他

第一回配本の「川端康成」から始まり、180名以上の昭和を飾る文学者の代表作品を収録しています。「あの作家のこの作品を……」と思われる方は足を運んでいただきたい。

